

# 東京撮影日記。

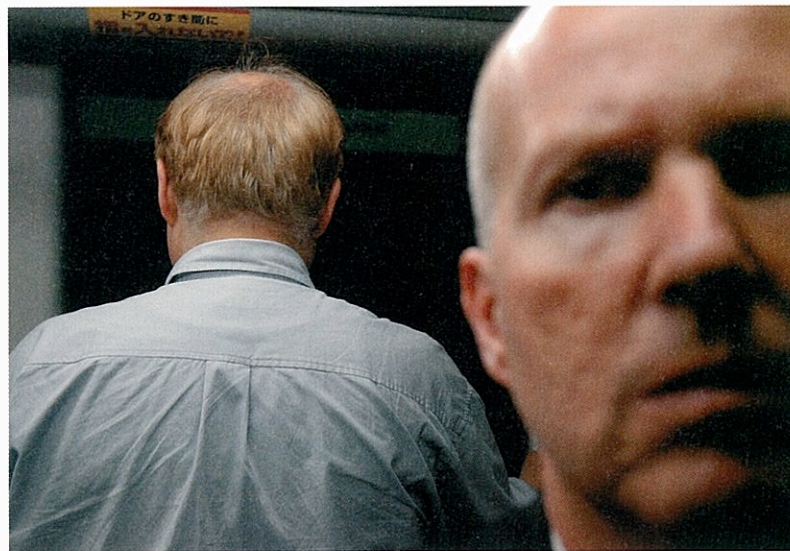
ベルギー生まれのフランス語作家・映画監督、ジャン＝フィリップ・トゥーサンが、東京を舞台とした自身の小説『愛しあう』を朗読する映像作品をつくるため、ブリュッセルからやってきた。旅する作家の来日はすでに十数回目。すっかり東京になじんだ異邦人として街をゆるやかに回遊する、トゥーサンの東京フォトエッセイ。

十五日



# ジャン＝フィリップ・トゥーサンのリップ

品川プリンスホテル内の水族館にて、ジャン＝フィリップ・トゥーサン。  
左ページ・西新宿・ホテル  
センチュリー・ハイアットから  
オペラシティを望む  
(このページのみ写真・香田純一)



## ジャン=フリップ・トゥーサン

文、写真 text & photographs by Jean-Philippe Toussaint

### 野崎 歓

translation by Kan Nozaki

1957年ベルギー・ブリュッセル生まれ。作家、映画監督。パリ政治学院卒業。パリ第一大学で現代史DEA取得後、アルジェリアで2年間、フランス語教師を務める。85年小説『浴室』でデビュー。著書に『ムッシュ』『カメラ』『ためらい』『テレビジョン』『愛しあう』、エッセイに『セルフ・ポートレート 異国にて』、監督作品に『ムッシュ』『カメラ』『アイスリンク』がある。

のざき かん 1959年生まれ。

東京大学大学院助教授。フランス文学・映画評論。トゥーサンの全作品を翻訳。著書に『香港映画の街角』『赤ちゃん教育』『五感で味わうフランス文学』など。

上・ビデオ作品のカメラマン、パスカル・オジェ(左)とトゥーサン。  
下・JR新宿駅南口改札。何度も来日している作家の、東京でのプライベート移動はほとんど電車

# 五月三十一日 火曜日

パスカル・オジェが東京にやってきた。ぼくの小説『愛しあう』の朗読ビデオを、一緒に撮影するのである。電話ボックスから電話してきたパスカルは、いささか途方にくれた様子。場所も方角もよくわからないのだろう。重たい金属製スーツケースにコード類やマイク、それに高性能デジタルカメラなどをぎっしり詰めこんできたはず。成田エクスプレ

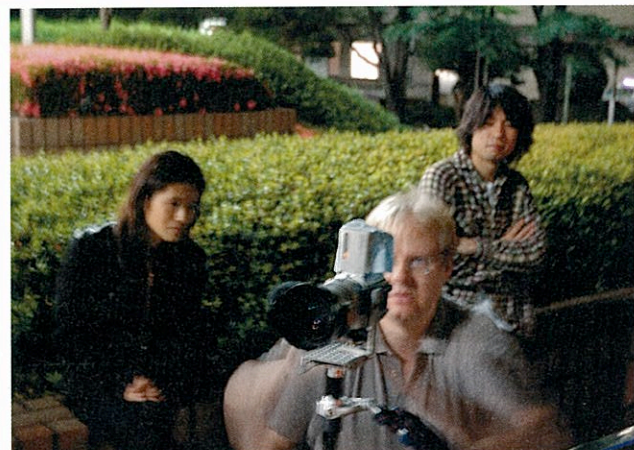
スで新宿まで来て、いまはルミネ2の六階にいますという。そこで待っていてくれといって、直ちに大学のゲストハウスの部屋を出、渋谷までは京王井の頭線、それから山手線に乗り換え、行き方は先刻承知、いまやぼくはぼくなり東京に溶け込み、掲示板を頼りにする必要もなく、改札口まで目をつぶったままだつてへつちやら、自動券売機で乗車券を購入

(駒場東大前・渋谷間は二二〇円、渋谷・新宿間は一五〇円)、エスカレーターを下り、改札口をぐぐりぬけ、通路を進み、新宿南口から出る、ぼくはまさしく「東京人」。

フィクションと合致するのだ。

パリから運んできたステディカムをパスカルが体に装着し、最後の確認をしてから、いよいよ新宿の街に分け入っていく。列の真ん中にパスカル、ぼくはパスカルの左に立って肩に手をかけ、盲人を手引きするようにして案内する。ミウラ・テツヤはその右、雑踏をかきわける切り込み役。約一時間のあいだ、そうやって夜の街に真っ向からぶつかっていく、新宿のまったなかで主観ショットによるトラヴェリング撮影を延々と続けた。ナレーションはあとで録音することしよう。

四月末にパリで、『愛しあう』の朗読ビデオを撮らないかともかけたとき、パスカル・オジェが言い出したのは、それなら東京で撮らなけりや、小説の舞台で撮影するべきだということだった。ちょうど五月に日本に行くことになっていんだとぼくが言い、日本で一緒に撮ることに話がまとまった。それから三週間もたないうちに、東京大学駒場キャンパスのレストランの日当たりのいいテラス席で再会、ベージュ色のパラソルの陰で計画を練り、どんな作品にするか意見を交わし、スケジュールを立てた。わが翻訳者、ノザキ・カンの口利きで、二人の学生が協力してくれることになり、ハイレベルのチームが組まれたのである(パスカル・オジェは哲学科出身、パリで哲学者ジル・ドゥルーズやフランソワ・シャトレの講義に出ていることがあり、ぼくはパリ政治学院卒業、ミウラ・テツヤはロベール・ブレッソン論で修士号を取得、イシバシ・キヨミはパリ第三大学でCG映像をめぐる研究で博士号を取ってきたばかり)。何というインテリ集団だ。しかしもちろん、機材を運んだり、撮影中の雑用をこなしたりする上でそれは大した役には立たない。まあいい、一行は新宿の最初の撮影場所に向かって電車に乗り、センチュリーハイアットのエントランス前で撮影に取りかかった。ここで現実は



上・パスカル・オジェ、イシバシ・キヨミ、ミウラ・テツヤ。センチュリーハイアットのエントランス前でステディカムを取り出しているところ。  
下・新宿ルミネ2の6階カフェで作家を待つパスカル・オジェ



「ガラスの扉が目前で自動的に開き、だれもないポーチの上でぼくらは夜の新鮮な空気をふたたび味わった。(…)小走りで大きな金属製の歩道橋の階段を駆け下りたが、それはいわば都市の水門とでもいうか、街の高低差のある部分を隔てる橋で、少し下の大通りに通じていた。やはり幽霊じみた、人けのない通りで、一列に並んだ街灯の光が夜の闇に白色光の点線を描き出していた。京王プラザホテルの白と金のイルミネーションに飾られた入口に近づくと、ぼくらは薄暗い通りにそれ、大型ホテルやビジネスホテルからなる区画から徐々に遠ざかり、店や小さなレストランが増え、もっと活気のある地帯に入っていた。闇の中に庭があつたり、店先にはちようちんや漢字の看板がかかっていたり、消えた電飾が薄暗がり沈んでいた。ときおりナイトクラブやホステスのいるバーの白やピンクのネオンの前を通りかかり、バーの前では人々がかたまつて語り合い、大ぶりなピンクのレインコートにミニスカート、青白い唇をした赤毛のつぼの女がいて、その脇に三つ揃いのスーツに身を固めたがりがりの男二人が立って何やらひそひそ話、その向こうの陰にはゴミ箱の横で所在なげな、頭のはげた老サンドイッチマンのやせたシルエツトが浮かび、ビラの束を片手に物思いにふけていた。先に進めば進むほど街は活気を増して様子も一変し、バーやネオンの数がふえ、人けのない歩道沿いに車が徐行し、スーフやたこ焼の匂いがし、セックスシヨップが並び、地下の店への入口には客引きと用心棒が立ち

ダブルのスーツを着た小男やドレッドヘアの大男、浮世絵風の横顔に黒の分厚いダウンジャケットを着た連中が目に入る。ぼくらの身なりに特別注目するような人間はだれもいず、二人は夜にまぎれ、いずれ劣らず奇矯な格好をした人々の中に溶け込んだ。マリイが着ているのは二カドルもするコレクシヨンの一品、ごくシンプルな、鉛筆でさつと描き上げたようなデザイン、背中がむき出しになったナイトブルーのシルクのドレスで、流線型でお腹にプロペラの飾りのついたそのドレスを彼女は驚くほどさりげなく着こなし、サンングラスを鼻につけて足元はホテルのピンクのスリッパ、一方ぼくは袖が腕の真ん中で終わっているような自分にはサイズが四ランクは下の黒い革のコートを着こんで窮屈このうえなく、はだしにホテルのゴムサンダルという姿、はじめどしたそのサンダルは早くも形が崩れ、底がつぶれて摩耗し、茶色く変色していた。」(愛しあうより)



上・ゆりかもめの車内で居眠りするカップル。  
下・レンタカーの窓から街を撮影

## 六月二日 金曜日

今日の夜はこれぞ本物の撮影らしい一夜となるだろう。時間遵守でいかなければならぬ。しのつく雨が降りやまない。車をレンタルし、パスカルは雨に濡れたウインドウ越しに街を撮影、ウインドウをワイパーがきしむつつ拭う様子に風情がある。運転手はテツヤ、レンタカーは自動ナビゲーター付きで、機械的で単調な声の日本語で言葉巧みに道順を教えてくれる——マوناクX交差点二到着、右二曲ガツクダサイ、左二曲ガツクダサイもちろん、ぼくが日本語を理解していると仮定しての話。最も驚くべきこと、それはテク

ノロジーの恩恵をふんだんに受けながらも、結局ぼくらが道に迷ってしまったということである。ぼくがポケットからくたくたに使い込んだ地図を取り出して検討してみるに、新橋に向かうには南に下るべきところ、真北に進んでしまふ。このままではもうすぐ新宿の幹線道路に出てしまう。さらに何度か回り道をした挙句、とうとう銀座に出て、夜の渋滞につかまった。ぼくらの車はなんだか周囲で唯一の個人乗用車みたいで、深夜のかきいれ時を待つ色とりどりのタクシーの海にはまったくま動きが取れなくなった。いささか心配な事態、というのよりもゆりかもめで撮るシーンが残っているのに、終電の時刻が迫ってきた。ついに駅前に到着、ぼくらはゆりかもめの終電に乗り込もうと、階段を必死で駆け上がる。すでに人けはなく、眠りこけたような構内。

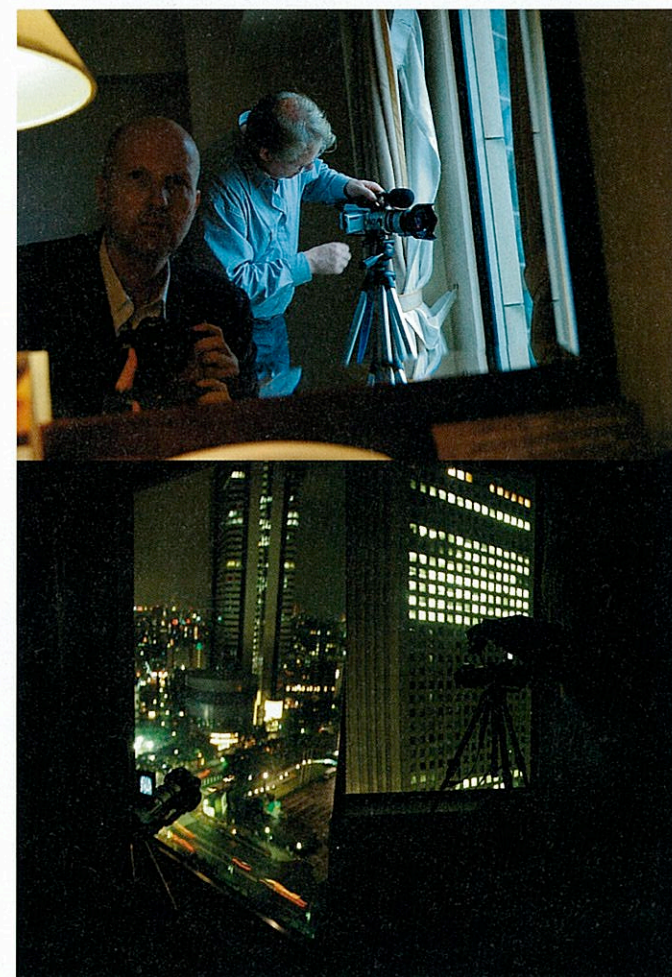


センチュリーハイアットの  
部屋で撮影準備

撮影最終日、センチュリーハイアットの部屋を取っておいた。その2006号室（ビデオが公開される年を讀えて？）の室内で、十時間ぶつとおしで、つまり午後二時から深夜まで、カメラの前で自作を朗読するのだ。窓の外では天気がくるくると変わり、あらゆる季節が過ぎていくかのようで、「徹夜明けの恐るべき灰色模様」というくたまりを讀んで

いるあいだは灰色の空だったのが、一転してざんざん降りのにわか雨、夕方五時になるころにはほとんど薄紫色の光が差し込んできたかと思うと、続いて夜が、本物の、美しい、東京の崇高なる夜が訪れ、正面のビルの明かりが一つずつ灯り、夜の幻想的な明かりのアサンブラージュがゆつくりと作り上げられていく。●

## 六月四日 土曜日



上・トウサンは今回の滞在中に、新宿「さくらや」で新しいデジタル一眼レフを購入。  
下、左ページ・同ホテルの部屋から、西新宿の夜